# Learning's Labour's Lost?

## ―― Hawthorne の *Fanshawe* について――

松　崎　　博

### 1

1828年10月の末，24歳のナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）は，ボストンの書肆，マーシュ・アンド・ケイプン社から『ファンショウ』（*Fanshawe*）を匿名で自費出版した。この作品への評価は，次に引用するセアラ・J. ヘイル（Sarah J. Hale）の評にみられるように，概して好意的なものだった（Pearce 303）。

> Purchase it, reader. There is but one volume, and trust me that is worth placing in your library.
>
> The time has arrived when our American authors should have something besides empty praise from their countrymen. (Idol 3)

初めて活字になったホーソーンの作品はたしかに好意的な書評を得た。しかし，出版からしばらく経って，ホーソーンは姉のエリザベス（Elizabeth）を訪ね，彼女の手元にあった『ファンショウ』を取り返し（1832年12月のことだ），親友のホレイショ・ブリッジ（Horatio Bridge）には，その焼却を求めた（Stewart 329, Bridge 68）。『ファンショウ』について，以後ホーソーンは沈黙を守り，妻のソファイア（Sophia）でさえ，その存在を知らなかった。

エリザベスも，そしてブリッジも，ホーソーンが『ファンショウ』の出来栄えに不満を抱き，それを恥じていたと回想する。この作品は，ホーソーン自身の行動やそれを伝える彼らの言葉などを根拠に，一般に「失敗作」と見なされてきた[1)]。エドウィン・ハヴィランド・ミラー（Edwin Haviland Miller）の「『ファンショウ』は軽視されてきた傑作ではない」という評言が端的に示すように，この作品に対する評価は現在も低く，したがって論じられることもあまりない（84）。例えば，2004年に出版された，リチャード・H. ミリントン（Richard H. Millington）が編纂した『ケンブリッジ版ナサニエル・ホーソーン必携』（*The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne*）のなかには『ファンショウ』についての言及は皆無，また2007年に出版されたリーランド・S. パーソン（Leland S. Person）の手になる『ケンブリッジ版ナサニエル・ホーソーン入門』（*The Cambridge Introduction to Nathaniel Hawthorne*）には，ホーソーンの5つの長編のうち，『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）以降の4つの作品について，それぞれ単独の議論が納められているが，『ファンショウ』はそのタイトルが一度言及されているだけである（2）。しかし，ホーソーン自身が不満のそぶりをみせ，また後の長編と比べて，若書きであることは否めないにしても，『ファンショウ』は本当に無視してよい作品なのだろうか。本作をめぐるホーソーンの姉や親友への尋常とは言いがたい振る舞いは，それだけで，この作品が考察に値するものであることを示しているのではあるまいか[2)]。

ホーソーンは『緋文字』によって文学者としての名声を確立した。この機に乗じて，1851年3月に彼の出版社だったティクナー・リード・アンド・フィールズ社は，1842年出版の『トワイス・トールド・テイルズ』（*Twice Told Tales*）を再版する。文学市場におけるホーソーンの売り込み戦略の一環だった（Brodhead 57）。その仕掛け人ジェイムズ・T. フィールズ（James T. Fields）は1850年の末に，ホーソーンの「昔の本」，すなわ

ち『ファンショウ』の「発掘」を目論んでいたことが知られているが，フィールズからの問い合わせに対して，1851年1月12日にホーソーンは次のような返事を書いた（Pearce 311）。

> You make an enquiry about some supposed former publication of mine. I cannot be sworn to make correct answers as to all the literary or other follies of my nonage; and I earnestly recommend you not to brush away the dust that may have settled over them. Whatever might do me credit, you may be pretty sure that I should be ready enough to bring forward. Anything else, it is our mutual interest to conceal…. (16: 383)[3)]

自分の名誉にならないものは，隠すのがお互いのためだというわけだ。この書簡に言及しつつ，マイケル・T. ギルモア（Michael T. Gilmore）は，自作の出版について抜け目がなかったホーソーンが，自らの市場性（marketability）に傷がつくのを恐れて，『ファンショウ』の復刻を出版社に思いとどまらせたのだと論じている（10）。しかし，『ファンショウ』の何がまずかったのか。ホーソーンが世間の人々に見せたくなかったものは何だったのか。T. ウォルター・ハーバート（T. Walter Herbert）によれば，『ファンショウ』の否認は，ホーソーンの「生涯に渡る自己形成の戦略」（the lifelong strategy of his self-making）に不可欠の行為だったという（Herbert [1993] 86）。とするならば，ホーソーンは自身の処女作を否認することによって，いかなる自己形成をめざし，それはまた自らの市場性とどのような関係にあったのか。本論は，『ファンショウ』の否認に見え隠れする，ナサニエル・ホーソーンという一人の作家の自己形成を，19世紀初頭のアメリカ文学をめぐる社会的状況を念頭に考察する。

## 2

人気作家たることを目指して書かれたと思しい『ファンショウ』は，当時の人気ジャンルだったゴシック小説や誘惑小説などの影響が色濃い（Baym [1974] 105）。物語の舞台はニューイングランドの山間の田舎町。この地にあるハーレー大学（Harley College）の学長メルモス（Melmoth）博士夫妻の元に預けられた，博士の旧友ラングトン（Langton）氏の娘エレン（Ellen）に，二人の学生，ハンサムで裕福なエドワード・ウォルコット（Edward Walcott）と学問をよくし高潔な人柄のファンショウが心を寄せるようになる。そこにラングトン氏の財産を狙うバトラー（Butler）が登場，エレンを誘拐する。彼女を取り戻すべく，メルモス博士，ウォルコット，ファンショウがそれぞれ追跡を開始する。やがてファンショウが彼らに追いつく。崖の上に彼の姿をみとめたバトラーは闘いを挑もうとするが，崖下に転落し命を落とす。この事件の後，エレンはファンショウと結婚を望むが彼は拒絶，厳しい学究の道に戻る。もともと病弱であったファンショウは若くしてこの世を去り，エレンはウォルコットと結ばれる。以上が『ファンショウ』のあらすじである。

物語の時代は，100年の歴史を有するハーレー大学が創設まもない「80年ほど前」とされている（3: 333, 334）。『ファンショウ』のなかの「現在」がいつなのか明言されてはいない。しかし物語は冒頭から，それが書かれた時代のいわゆる「市場革命」がアメリカ社会にもたらした変化を映し出している（Mancall 16）。それゆえ『ファンショウ』の出版された頃が，おそらく物語内の「現在」と考えられる。したがって，この作品が世に出た1830年前後から80年遡れば，物語の主な舞台は1750年頃に設定されていると言えるだろう[4)]。

この物語は一種の回想録である。そして呼び起こされる過去には，語り手が生きている「今」が影を落としている。『ファンショウ』は1828年出版された。この年は，アンドルー・ジャクソン（Andrew Jackson）がジョン・クィンジー・アダムズ（John Quincy Adams）を破り大統領選挙に勝利した年だ。ジャクソンはホーソーンにとって特別な人物であったようだ。なぜなら，大統領となったジャクソンが1833年にセイラムを訪問したとき，ホーソーンは町外れまでわざわざ出かけ，彼の到着を歓呼して迎えているからだ（Stewart 325）。このジャクソンの時代の価値観，

とくに「男らしさ」をめぐる価値観が『ファンショウ』に大きな影響を与えている。

ジャクソンとアダムズの選挙戦は「農夫（plowman）」対「教授（professor）」の争いとみなされ，ジャクソンの勝利は「知識」に対する「行動」の勝利と受け取られた（Pugh 18）。この選挙の結果は当時のアメリカの人々の価値観を反映している。ジャクソンの勝利はアメリカにおける反知性主義の流れを可視化するものであり，知識人の地位のさらなる低下は避けられなかった。1827年にアメリカにやってきて，ボストンの私立学校でしばらく教師をしていたことがあるボヘミア出身の政治ジャーナリスト，フランシス・グランド（Francis Grund）は当地の実業家たちに，教授たちは「二流の男（secondary men）」であり，有能な子供には商売の手ほどきをし，「少々耳が悪かったり，頭の回転よくない可哀想な若者を大学へ行かせるのだ」と言われたという（Pessen 28）[5]。このように大学や学者の評価が低いのは，そこで授けられる知識の市場価値が乏しかったからだ。『ファンショウ』において，料理などの技術で可能な限り「役に立とう（useful）」としているエレンの心を，学生たちが大学での厳しい修練によって獲得したラテン語，ギリシア語あるいはヘブライ語によってしたためた恋文が動かすことはない（3: 342）。大学で習得される知が実社会では役に立たないと見なされていることを，このエピソードは駄目を押すように示している。そして，以下の引用にみられる『ファンショウ』の舞台となるハリー大学の権威の凋落は，物語が書かれた頃のアメリカ社会における大学への評価の低下を反映してのことだろう。

> … circumstances, which need not be particularized, have of late years involved [Harley College] in a deeper obscurity. There are now few candidates for the degrees that the College is authorized to bestow. (3: 333)

ではこの大学はどのような人材を輩出してきたのか。「国家の緊急時に求められる，現在のままの方が有用（useful）であり，思索的な知識の欠落が，実践上の能力の欠如とは見なされない男たち」をこの大学は世に送り出してきたという。学位をもとめる者たちがいないことは，市場価値の無い知に対する世間の無関心を示している（3: 333–4）。かくのごとく，世間から軽んじられている大学の長であるメルモス博士は，実社会とはおよそ無縁の人物だ。「学識豊かな正統派の牧師」であり「広い学識と研究の深さを示す数冊の本の著者」でもあるメルモス博士は，あらゆる教会にその名声が知れ渡っていたが，その能力が「実用性」の方面に向けられることはほとんどなかったという（3: 335）。彼には世間が求める「実践上の能力」が欠けていたのである。失踪したエレンを追跡する過程で，博士はその無能ぶりをさらけ出す。なすすべもなく途方にくれる博士は，妻にいちいち指示を仰がねばならないのだ（3: 405–6）。博士の狼狽ぶりは，ビジネスの世界で生きてきたエレンの父であるラングトン氏が，娘を取り戻そうとあらゆる手立てを尽くしたあとに見せた落ち着きとは対照的である（3: 442）。博士の学識や才能をこの上なく評価しているエレンにさえ，世俗の問題の扱いに関しては，彼女の方が彼よりもはるかに優れていると思われてしまっている（3: 429）。そして「世事においてはまったくの子供」（3: 415）と語り手が評するメルモス博士の実践上の能力の欠如が，滑稽なまでに暴露される極めつけの場面がある。ウォルコットにドン・キホーテよろしく，杖を槍の代わりにして敵に突撃したらどうかと冗談まじりに言われた博士は，大真面目で次のように答えるのだ。

> No, no, young man; I have left unfinished in my study a learned treatise, important not only to the present age, but to posterity, for whose sakes I must take heed to my safety. (3: 417)

世間の人々は教育者としての彼の仕事には関心を寄せても，その学問的な業績には無関心であることに彼は気づいていない（3: 335）。エレンの失踪事件が決着をみた後，登場人物たちのその後について，メルモス博士に対しては「ここで語る必要はない」，もし関心があるなら，彼の後任者が，その説教や著作物とともに出版した伝記を読者は参照するようにと語り手は述べる（3: 460）。そ

のそっけない口ぶりから，「現代」のみならず「後世」の人々も彼の論文に関心を払うことはなく，彼が歴史の中に沈んでゆく人物であることを，われわれは予期することだろう。メルモス博士はこのように世事についての鈍感と無能力という問題を抱えていた。そして彼にはもう一つの問題があった。「女性化」である。

エレンの追跡について，煮え切らない態度をとり続ける夫に対して，メルモス夫人は「ああ，男の肝っ玉（the spirit of a man）を持った男に心底会いたいものだわ。あなたじゃなくって」と言い放つのだ（3: 406）。つまりメルモス博士は男らしくないというのである。しかしこの「女性化」という問題はメルモス博士固有の問題ではなかった。アメリカでは18世紀から19世紀にかけて牧師の地位が低下する。その原因の一つは，この職業の女性化という問題だった。アン・ダグラス（Ann Douglas）が『アメリカ文化の女性化』（*The Feminization of American Culture*）で論じているように，市場などのいわゆる「男の領域」から距離を置き，家庭や女性に囲まれたなかで，他人のために献身というような女性的とされた仕事を行うことが多い牧師は，女性的な職業とみなされるようになっていたのだ（17–49, 94–139）。E. アンソニー・ロタンド（E. Anthony Rotundo）は，教職には女性的なオーラがあったが，「大学の学長職は男らしいもの」とされていたと述べている（170）。とするならば，本来，学長とは男性的なものであるはずだ。しかし，メルモス学長は牧師であることによって，その男性性が無化されてしまっているのだ。

カール・ボーデ（Carl Bode）は，『ファンショウ』は「人生の選択」を扱っているのだと述べ（239），ベレンダ・ワイナップル（Brenda Wineapple）は「職業についての大学小説」とこの物語を評した（64）。また，ロイ・ハーヴェイ・ピアス（Roy Harvey Pearce）が「ファンショウ（Fanshawe）には，ホーソーン（Hawthorne）自身の名前の痕跡があるのではないか」と指摘しているように，ファンショウのモデルはしばしばホーソーン本人であるとされる（305）。とするならば，一見ファンショウの人生の選択は奇妙にみえる。ホーソーンが自分自身を思わせる主人公に，メルモス博士が体現するネガティヴな属性を付与された学究の道を突き進ませるからだ。しかし，そこにはホーソーンの目論見がある。なぜなら，ホーソーンは学究の徒であるファンショウから女性的なもの払拭し，また，この主人公が世事においても無能でないことを示そうとするからだ。

## 3

ホーソーンにはしばしば指摘されるように女性的なところがあったようだ（Mellow 7）。たとえば，『緋文字』の序文「税関」にもその名が言及されている友人のジョージ・ヒラード（George Hillard）は，「彼ほど女性的なところをもった男はいない。鋭敏な知覚，細やかな洞察力，美に対する感受性において彼は女性的だった」と言い，ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロウ（Henry Wadsworth Longfellow）は「ホーソーンと話していると女性と会話しているようだ」と述べている（Lathrop 555，559に引用）。周囲が自分をどのように見ているか，ホーソーンはおそらく知っていたに違いない。女性的だとされた自分自身のイメージを払拭するかのように，ホーソーンはファンショウの登場の場面で彼のたくましさを強調する。

> [Fanshawe] could scarcely have attained his twentieth year, and was possessed of a face and form, such as Nature bestows on none but her favorites. There was a nobleness on his high forehead, which time would have deepened into majesty; and all his features were formed with a strength and boldness, of which the paleness, produced by study and confinement, could not deprive them. The expression of his countenance was not a melancholy one;—on the contrary, it was proud and high—perhaps triumphant—like one who was a ruler in a world of his own, and independent of the beings that surrounded him. (3: 346)

研究のために部屋に閉じこもっていたがゆえに，

ファンショウの面差しは青白くとも，そこには「力強さと大胆さ」があり，周囲から「独立」して自らの世界を統べる「支配者」の風格さえ彼には備わっていたというのだ。ファンショウが「男らしさ」を有していることは他の登場人物の目にも明らかになる。エレン奪回の過程で，ファンショウの「貴婦人が愛し，敵が恐れるような男らしい若者（manly youth）」ぶりに，ウォルコットは彼を「侮れないライヴァル」と見なし，エレンを奪われてしまうのではないかと不安を覚えるようになるのだ（3: 414）。同性のウォルコットが彼をライヴァル視したことは，ファンショウの男らしさという問題に関して，きわめて大きな意味をもっている（Mancall 22）[6]。なぜなら，男らしさの証明には，男同士の競争が重要だからだ。マイケル・キメル（Michael Kimmel）が論じているように，男らしさを証明したいなら，男たちは他の男たちの眼前でそれを示さねばならず，「19世紀の初めから今日まで，自らの男らしさを証明しようとする男たちの絶え間のない努力には，このようなホモソーシャリティがその重要な要素として含まれている」のだ（26）。

このようにファンショウについては確かに男性化が図られていてはいる。しかし，彼の男らしさには，どこか不自然さがつきまとう。ファンショウはエレンの救出に向かう馬上で「心底休みたい，いつもの部屋に戻りたい」と思い（3: 444），バトラーの事故死によって，彼は自らの腕力を示すチャンスを結局奪われる。そして彼女からのプロポーズさえ彼は拒絶している。つまり，ファンショウの男性化が図られる一方で，それを相殺するかのようなエピソードもテクストには書き込まれているのだ。しかし，このようなファンショウの男らしさについての疑念を払拭するかのように，物語の大詰めで，学究生活に戻ったファンショウについて語り手は，彼が「気弱な男たち（weak men）」と違って，エレンへの愛を自らの胸の奥に秘めておくことなく，学問に精魂を傾け，「勝利者（conqueror）」となったと述べる（3: 459）。ファンショウの男性性の再確認のように読める部分だ。ただ，われわれがここで気をつけなければならないのは，ヘレンを拒絶し，家庭の幸せを捨てたファンショウを，「勝利者」と呼ぶのは物語の登場人物たちではなく，その語り手であるということだ。この評価はあくまでも，この人物の主観によるものなのだ。それゆえ「現実世界とは無縁の，何を追い求めるにしても世間の感情には無関心で，それに影響されることもない」ことをファンショウ本人が自覚し（3: 350），そしてまた，ピアスが「アメリカ社会ではあまりに異常」（306）と評する彼のとった行動を，語り手以外の，例えば19世紀の人々が「勝利者」と評するかはかなり疑わしい。

『ファンショウ』の語り手は，どのような人物なのか。語り手が一瞬その素顔をのぞかせる場面がある。バトラーの母親の葬式の場面でのことだ。語り手は彼女の弔いに集った「深い悲しみの表情を浮かべた」女性たちを，墓を暴いて死体を貪り食う悪霊に例え，神が女性に与えた「病める者を看病し，苦しんでいる者を慰めるという性質」が，「苦痛と死と悲しみの情景への忌まわしい愛着へとしばしば堕落している」と述べる。そして，傍白のごとく括弧に入れられた文章を含む，次の長い引用部が続く。

> (It is sometimes, though less frequently, the case, that this disposition to make a 'joy of grief' extends to individuals of the other sex. But in us it is even less excusable and more disgusting, because it is <u>our nature</u> to shun the sick and afflicted; and, unless restrained by principles other than we bring into the world with us, men might follow the example of many animals in destroying the infirm of their own species. Indeed, instances of this nature might be adduced among savage nations.) Sometimes, however, from an original *lusus naturæ*, or from the influence of circumstances, a man becomes a haunter of death-beds—a tormentor of afflicted hearts—and a follower of funerals. Such an abomination now appeared before Fanshawe, and beckoned him into the cottage. (3: 445–6)（下線は引用者）

この部分で重要な意味をもっているのは，下線を付した「われわれの本性（our nature）」という部分だ。ジェイムズ・N. マンコール（James N. Mancall）が指摘しているように，死者を食いものにするかのごとき女性たちの「悲嘆の喜び」を糾弾した後で，この語り手は，病んだり，苦しんでいる者たちを避けるのが「われわれの本性」だと述べ，自らが男性であることを明かしているのだ（25）。さらに，この語り手は，死の床にはべる男を“freak of nature（奇形）”を意味する“*lusus naturæ*”や「忌まわしき者（abomination）」と評し，この人物との対比によって，自らがノーマルであること主張している。この自身の「正常」さの主張には，ではいかなる意味が込められているのか。

病んだり，苦しんでいる者たちに，男性が近づかないのは，「もって生まれたもの以外の原理」によって抑圧されなければ，弱者を滅ぼしてしまうからだと語り手は言う。彼の論法からするならば，死者の床に近づく男は，弱肉強食的志向がないか（それは「競争」からの離脱を意味する），「悲嘆の喜び」のような堕落した女性の嗜好を有しているかのどちらかということになろう。つまり死の床にはべるような男は女性的ということなのだ。このような，いわば軟弱な男たちと自らを差異化し，自己の「正常性」を主張しようとする語りの背後には，語り手自身の「男らしさ」への強い思いが隠されている。そして，上記の引用は，現代のわれわれにとっては常識となっている，生物学的な性（セックス）と社会的・文化的に形成される性（ジェンダー）の区分を，（19世紀では当然のことながら）語り手が意識していないことも示している。彼にとって，病んだり，苦しんでいる者たちを避けるのは，男性が「自然」にもっている性質であり，病める者を看病し，苦しんでいる者を慰めるという性質は「神が女性に与えたもの」なのだ。『ファンショウ』の語り手は男らしさへの願望を抱いている。そしてその作者であるナサニエル・ホーソーン自身も，物語の語り手同様，男らしさを「自然のもの」と思い，その呪縛から逃れられなかった。

## 4

ロングフェロウや第14代のアメリカ大統領となったフランクリン・ピアス（Franklin Pierce）といった友人たちの選択からも窺えるように，ホーソーンは保守的な傾向の強い人物だった（Reynolds 11）。したがって，1830年の12月に『セイラム・ガゼット』（*Salem Gazette*）に発表された「ハッチンソン夫人」（“Mrs. Hutchinson”）という有名なエッセイのなかで，男女の「自然の厳然たる区分」を「恣意的な違い」と考える「誤った寛容さ」に対して，彼が苦言を呈しても何の不思議もない（23: 66）。このように，男らしさや女らしさを自然なものと考えるホーソーンにとって，それらの「永久普遍の構造」からの逸脱は大きな代償をともなうものだったと考えられる。彼には時代が求める男性像を拒絶することなどできなかったのだ（Herbert [2004] 62）。ジェンダーをめぐってホーソーンが抱えていた問題は，彼が時代の求める男性像を拒絶できずに，それを自ら奉じてしまったところから来ている。セイラムの町外れでジャクソンを歓呼して出迎え，そしてまた，後年セイラムの税関を解雇されて経済的に困窮し，家族を支えることが困難になった時，「人生における失敗は恥」とまでヒラードへの手紙に書いたホーソーン（16: 309）。これらのエピソードは，当時のアメリカ社会が要求する男性像を彼が認識し，それを自ら内在化させていたことを示している。

ホーソーンが社会を求める男らしさに敏感にならざるをえなかった背景にはいくつかの理由が考えられる。既に述べた友人たちに女性的と評された彼の気質，作家という職業の選択，そして世間に流布していた男らしさをめぐる言説，これらがこの問題に大きく影響しているのは確実だろう。ロタンドによれば，1800年以前のニューイングランドでは，“manhood”“masculinity”などの言葉はめったに使用されず，男らしさなどの問題が頻繁に議論されることはなかったという（10）。男らしさに関する言葉が，多くの人々の口にのぼるようになったのは19世紀以降のことらしいの

だ。そして，ジャクソン時代の男性の規範であった，独立独行の男性を表す“self-made man”という言葉が，当時の上院議員だったヘンリー・クレイ（Henry Clay）によって作られたのは1832年[7]。つまり，1804年生まれのホーソーンは，巷で男らしさについての議論が活発になった時代を生きていたことになる。

ホーソーンの時代の男性にとって仕事は自己認識と密接な関係があり，職業の選択は仕事を選ぶ以上の意味合いがあった。1844年のこと，ニューヨークのある大学生は婚約者への手紙に「人生を無為に過ごすのは男らしくないし，ひどく不自然だ」としたため，「適切な仕事（Suitable employment）」を選ぶことが重要だと付け加えた。男たちにとって，仕事をすること，そして男性らしい職業を選択することが大きな課題になっていたのだ（Rotund 168）。大学入学を半年後に控えた16歳のホーソーンが母に送った手紙に自身の将来について語った部分がある。そのなかで，彼は牧師，弁護士，医者のいずれになることも気が進まず，「職業をもたずに，暮らせるほど裕福だったら」と述べている（15: 138–9）[8]。19世紀の男性にとって，仕事をもつことは自らの男らしさ証明にとって重要な意味を有していたとすれば，ホーソーンの志望は当時の男性性の規範からの大きな逸脱である。

牧師，弁護士，医者になることを拒絶したホーソーンは，経済的なリスクが大きいことを承知の上で，ペンによって身を立てる道を選択する。そして「僕の作品が，英国の男の物書きたち（scribbling sons）の作品に匹敵すると賞賛されたら，誇らしくはありませんか」と母親に明かしているように，文学による栄達を望んだ（15: 139）。しかし，ホーソーンの選択には問題があった。彼自身も認識していたように，文学は役に立たない，怠け者の仕事とされ，男の職業とはみなされていなかったからだ（Wineapple 79）。そこでホーソーンがしたことは何か。文学のいわば男性化だ。それを彼の母親への手紙から読み取ることができるように思われる。ホーソーンは自作の比較の対象として，アメリカの文学市場で幅をきかせつつあった，彼が嫌悪した「物書き女たち（scribbling women）」ではなく，英国の「男の物書きたち」を呼び寄せ，「女性的」とされた文学の地位を向上させ，それを男性化しようとしているのだ。以後も，彼はしばしば同様の試みを行う。

1854年に出版された『旧牧師館の苔』（*Mosses from an Old Manse*）の改訂版に収められた「断念された作品からの抜粋」（“Passages from a Relinquished Work”）のなかに次のような一節がある[9]。

> Hitherto, I had immensely underrated the difficulties of my idle trade; now I recognized, that it demanded nothing short of my whole powers, cultivated to the utmost, and exerted with the same prodigality as if I were speaking for a great party, or for the nation at large, on the floor of the capitol. (10: 416)

文学という「役に立たない仕事（idle trade）」は，自分の「全能力（whole powers）」を必要とし，議事堂での答弁のごとく，その能力は出し惜しみせずに使われなければならないというのだ。独立革命以後，産業革命の波に洗われたアメリカでは，男性は公的な外の世界で働き，女性は私的な家庭を守るという「領域分離」に基づいた社会システムが形成される。ホーソーンはこの引用部で，作家の仕事の舞台を家庭という私的な領域から，国会という公的な領域に移行し，「全能力」を必要とすると述べることで，女性的とされている文学の男性的な仕事への転換を目論んでいる。『ファンショウ』においても，ホーソーンは文学の男性化を試みる。そのひとつは，女性的な性格を有する当時の文学上の規範の拒絶だ。

19世紀の女性たちによって多く書かれ，人気を博した「家庭小説」には，死の床に伏せる登場人物たちがしばしば登場する。死に瀕しているのは，たいてい子供か母親だ。ジェイン・トムキンズ（Jane Tompkins）によれば，罪深い者たちを改心させる彼女たちの力は19世紀の大衆文学や宗教文学の重要なテーマだったという（128）。ホーソーンは『ファンショウ』において，お涙頂戴的

な母親の死の床の場面を描きながら，その感傷の力を否定し，死の床という女性的な性格をもつ当時の重要な文学的規範を拒絶する。死の時を迎えつつあるある母の姿を目の当たりにして，悪漢バトラーは一瞬，心が動く。「悪徳の生活によって，生来の感情が破壊されてしまったとは言わないまでも，それを鈍らせてしまった息子の嘆きは，外見よりも激しいものだったようだ」と語り手は言う。しかし，バトラーが改心することはなかった。「悪魔は，母親が自らの死を賭して，彼の心に芽生えさせた改心の思いを打ち砕き，彼を破滅へと導いていった」のである（3: 435）。昔なじみの宿屋の主人，ヒュー・クロンビー（Hugh Crombie）の「優しい母親がいたら，世間の鼻つまみにならずにすんだのに」という言葉に，「目一杯男になれ」とバトラーに言わせたホーソーン（3: 377）[10]。このようなドライな気質を持つバトラーの，死の時を迎えつつある母親への冷酷ともいえる振る舞いを通して，ホーソーンは自らの作品から女性的な感傷性を払拭しようとしているのだ。『ファンショウ』における，ホーソーンの自作の男性化についての試みはこれだけではない。

『ファンショウ』の各章の冒頭には，ワイナップルが「これ見よがし（showy）」と評する，彼の後の作品にはみられないエピグラフが付されている（65）。すべてホーソーンが母親への手紙で言及した，ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）をはじめとするイギリスの「男の物書きたち」の作品からの引用である。このエピグラフについて藤村希は「ホーソーンは，イギリスのマスターたちを呼び寄せることによって，輝かしい名声を残す作家たちとの関係に自らを位置づけようとしている」と論じている（137）。19世紀の男たちが自らの男らしさを証明するため，男性同士の競争，あるいはライヴァル関係を必要としたこと念頭に，この考え方をさらに進めるならば，『ファンショウ』のエピグラフは，そのような関係をテクスト内に作り出し，外の世界に向かって自らの男らしさを示すための，駆け出しの作家の気負った企てだったと言えるのではあるまいか。

## 5

ミリセント・ベル（Millicent Bell）が明らかにしているように，『ファンショウ』の第1章と第2章のエピグラフはシェイクスピアの『恋の骨折り損』（*Love's Labour's Lost*）からのものだ（1255）。この喜劇では，硬直した知が笑いのめされ，そのこわばりが恋によって解きほぐされていく。舞台はナヴァール王国。宮廷を学問の府とし，女性の出入りを禁止することを，王が3人の臣下たちと共に誓うところからこの恋愛劇は始まる。「我が宮廷をささやかなプラトンの学園に（Our court shall be a little academy）」という『ファンショウ』の第1章のエピグラフは，『恋の骨折り損』の第1幕1場でナヴァール王が述べるセリフのなかにあるのだが，彼は次のようにこの芝居の口火を切る[11]。

Let fame, that all hunt after in their lives,
Live register'd upon our brazen tombs,
And then grace us in the disgrace of death;
When, spite of cormorant devouring Time,
Th's endeavour of this present breath may buy
That honour which shall bate his scythe's keen edge,
And make us heirs of eternity.
Therefore, brave conquerors—for so you are,
That war against your own affections
And the huge army of the world's desires—
(Shakespeare 3)（下線は引用者）

この引用にあるように「すべての者たちは生きている間に名声を求め，それを永遠に生かすべく我らの真鍮の墓碑に刻ませよう」というセリフで『恋の骨折り損』は始まるのだ。家庭の幸福を約束するエレンの手を振り切り，語り手が「勝利者（conqueror）」と呼んだファンショウは，「不滅の名声（undying fame）」への夢を胸に秘め（3: 350），研鑽の日々に若き命をすり減らす。そしてその死後，友人たちによって，早世した彼を顕彰する「勤勉なる学生にして優れた学徒」という碑文が刻まれた墓が作られる。名声のために「己の情動」や「俗世の欲望」を断ち切った者は「勝利

者」となると告げる『恋の骨折り損』の冒頭はファンショウの人生と酷似している。指摘されることは全くと言ってよいほどないが，『ファンショウ』冒頭のエピグラフは（そのような性格を有するものとはいえ），その出典を知る者に，これから語られる物語の内容を仄めかすものになっているのだ。

ファンショウは不滅の名声を求め，友人たちの立てた墓によって彼の願望は成就したかにみえる。しかし，物語に書き込まれたもうひとつの墓がたどった運命をみるならば，彼の名声が「不滅」であるかは疑問だ。もうひとつの墓とはバトラーのものである。崖からの転落現場の近くにバトラーは埋葬されたのだが，彼のために何者かが苦労して岩に刻んだ碑文は80年の月日を経て薄れ，「文字の跡はまだ分かるけれども，どうがんばってみても筋の通った意味を読み取れなくなっている」(3: 454)。大理石に刻まれたファンショウの碑文が永遠とは言い切れまい。

ファンショウの墓に刻まれた「勤勉な学生にして優れた学徒の亡骸」という言葉は，1688年に19歳で夭折したコットン・マザー（Cotton Mather）の弟，ナサニエル（Nathaniel）の墓から借用されたものとされる。16歳でハーヴァードを卒業したナサニエルは，彼自身の言葉を借りれば，「骨がバラバラになるのではないか思われるほどまで」勉強を続けたという（Miller 80）。ファンショウの碑文に使われた文言の出典はコットン・マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』（*Magnalia Christi Americana*, 1702）だそうだ（Bell 1256）[12]。しかし，セイラムのチャーター・ストリートの墓地にあるナサニエルの墓に実際に刻まれているのは，彼の没した年月日と名前，そして「この世で19回しか冬を見なかった老成した人物（An Aged person that had seen but Nineteen Winters in the World）」という文字だけだ[13]。子供の頃からこの墓地で遊んでいたホーソーンはこの墓のことを知っていたようだ。そして，それは彼にとって忘れえぬものだったらしく，『ファンショウ』の出版から10年後，1838年７月４日に彼は以下のようにノートに記している[14]。

> There, too, is the grave of Nathaniel Mater, the younger brother of Cotton, and mentioned in the Magnalia as a hard student, and of great promise. "An aged man at nineteen years," saith the grave-stone. It affected me deeply, when I had cleared away the grass from the half-buried stone, and read the name. An apple-tree or two hang over these old graves, and throw down the blighted fruit on Nathaniel Mather's grave,—he blighted too. (8: 173)

コットン・マザーは，ナサニエルは若者たちの模範にふさわしいと考え，弟の死から２週間で，彼の伝記『19歳にして非凡な学識と美徳の例となり1688年10月17年に昇天せしナサニエル・マザー氏の生と死に若くして実証された敬神』（*Early Piety, Exemplified in the Life and Death of Mr. Nathaniel Mather, Who Having Become at the Age of Nineteen, an Instance of More Than Common Learning and Virtue, Changed Earth for Heaven, Oct, 17. 1688,* 1689）を書上げたらしい（Miller 81）。コットン・マザー（1663–1728）の時代には，学問に没頭する敬虔な若者の姿が規範となったかもしれない。しかし，ファンショウが他の者たちの模範になることはない。なぜなら，ファンショウの死に対して「思慮深い人々も賢明なる人々も，その死が早すぎたと嘆きはしなかった。彼は自分には相応しくない世界を去っただけなのだ」と述べられているように（3: 460），世間との関わりを断ち「死者との対話」によって「孤独な学究」の道を突き進むような若者は，すでに時代遅れの存在だったからだ（3: 350）。友人たちはファンショウを奇特な人物とは思っても，見習おうとは露とも思わなかっただろう。彼らがナサニエルの墓碑銘（とされるもの）を借用したのは，ファンショウが模範的な人物だったからではなく，その狂おしいまでの知識欲と夭折が両者の共通点だったからに過ぎないのだ。18世紀最大の神学者といわれるジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards）が，長年勤めたマサチューセッツの教会を，その極端なカルヴィン主義によって解任さ

れたのが1750年，「アメリカのセルフ・メイド・マンの原型」と呼ばれる（Kimmel 20），ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）が「富に至る道」（“The Way to Wealth”）を発表したのは1758年ことだ。『ファンショウ』は社会が急速に世俗化し，功利主義に向かう時代の物語を，アンドルー・ジャクソンが大統領に選ばれた時代から回想した作品なのだ[15]。ホーソーンその人は同じ名前をもつナサニエル・マザーの墓に心を深く揺さぶられていたかもしれない。しかし，その周りには草が茂り，墓石も半ば土に埋まっている。それは，ナサニエル・マザーが人々の模範となりえた時代は遠くに過ぎ去り，その存在すら人々から忘れ去られようとしていた証のようにみえる[16]。そして世間の人々が顧みない墓へのホーソーンの思い入れは，彼と俗世の価値観のずれを暗示している。

## 6

マンコールは「『ファンショウ』において，ホーソーンは男性芸術家を，女性的で軟弱な存在ではなく，英雄的な勝利者に作り直そうとしている」と論じている[17]。しかし，マンコールが続けて述べているように，この結果は読者にとっても，（最終的に）彼自身にとっても満足のゆくものではなかった（15）。現存部数の少なさからも推察されるように，ヘイルが「お求めなさい。……あなたの書斎に置く価値があります」と賞賛したところで，読者たちが，特異な主人公を称える『ファンショウ』に飛びつくことはなかったのだ（Miller 84）。読者の賛同を得られなければ，野心的な試みも，作家の一人よがりとみなされ，教会関係者という限られ人々にしか相手にされなかったメルモス博士の著作の運命をたどる。読者の離反は職業作家にとって致命的だ。批評家たちが口を揃えて言うように，ホーソーンはまだ「青二才」だったのだ（Wineapple 65）。『ファンショウ』はホーソーンの5つの長編のなかで，定職をもったことがない独身時代に書かれた唯一の作品だ。『ファンショウ』の後，彼は税関での勤務や結婚生活を通して，否応なく俗世との関わりをもっていく。そして，彼は文学の世界で生き，名声を手中にするためのしたたかさを身に着けるのだ。『ファンショウ』から20数年たって，ホーソーンは自分の作品を「1ページも読んだことがなく，すべて読んでいたとしても，おそらく，それで余分に敬意をはらうこともなかった」ような人々の間で働いた税関での経験から，『緋文字』の序文に次のように書いている。

> It is a good lesson—though it may often be a hard one—for a man who has dreamed of literary fame, and of making for himself a rank among the world’s dignitaries by such means, to step aside out of the narrow circle in which his claims are recognized, and to find how utterly devoid of significance, beyond that circle, is all that he achieves, and all he aims at. I know not that I especially needed the lesson, either in the way of warning or rebuke; but, at any rate, I learned it thoroughly…. (1: 26–7)

では，ホーソーンは一人の文学者として，どのようなしたたかさを身に着けていていったのか。『ファンショウ』と『緋文字』の間に何が変わったのか。明白なのは彼自身と登場人物や語り手との距離のとり方だ。

ミラーは『ファンショウ』はロマンスであると同時に「自伝」であり，作者のホーソーンは「その芸術的な欠点と告白的な性質」を確実に認識していたと主張している（78）。つまり，ファンショウとホーソーン自身の類似，またバトラーの母の死の床での語り手の傍白における，一人称の「われわれ」の使用などに見られるように，『ファンショウ』では作者と語り手や主人公との距離が近すぎるのだ。『緋文字』において，語り手が「自伝的」であってよいのは，自らのことを語りながらも，「胸の奥の本当の自分（the inmost Me）をヴェールの背後に隠す」ときだけだと述べているが（1: 4），『ファンショウ』ではホーソーン本人の素顔が覗きすぎる嫌いがある。世間の常識や規範に異を唱えようとすれば，もっと慎重さが必要なのだ。

『ファンショウ』が出版される8年ほど前，レ

スリー・A. フィードラー（Leslie A. Fiedler）が，その誕生は「アメリカの想像力を統括する」と評し，後のアメリカ文学に大きな影響を与えた一人のキャラクターが世に送り出された（25）。ワシントン・アーヴィング（Washington Irving）が『スケッチ・ブック』（*The Sketch-Book*, 1820–1）のなかに登場させた有名なリップ・ヴァン・ウィンクル（Rip Van Winkle）である。なぜここで，彼を持ち出すのか。それは二つの作品の間に，興味深い共通点と相違点があるからだ。両者とも世間の常識から外れた主人公を扱っているのだが，その語り方が違うのだ。まず，共通点から。以下の引用にみるように，リップは俗世の金になるような仕事に一切関わろうとしないが，ファンショウがそうであったように，無能だったわけではない。

> He would never refuse to assist a neighbor even in the roughest toil, and was a foremost man at all country frolics for husking Indian corn, or building stone-fences; the women of the village, too, used to employ him to run their errands, and to do such little odd jobs as their less obliging husbands would not do for them. In a word Rip was ready to attend to anybody's business but his own; but as to doing family duty, and keeping his farm in order, he found it impossible. (Irving 35)

このように人は良くても，金儲けの出来ないリップについて根本治は「資本主義経済の本質である貪欲な個人主義に対する嫌悪感を表す造形なのだ」と指摘している（36）。つまり，リップはアメリカ社会の根幹にあるイデオロギーを否定するような登場人物なのだ。世間の顰蹙を買うのは必至だ。しかし，慎重な語り手（そして作者のアーヴィング）は「リップ・ヴァン・ウィンクル」という物語を自作ではなく，ディートリヒ・ニッカーボッカーなる老紳士の遺品の文書のなかに発見されたものとし，物語と自分との間に距離を置くことで世間の非難を避けようとしている（33）。そしてさらに，この老紳士は勝手気ままなところがあり，時に「砂ぼこりをたてて，周囲の人たちの目を痛め，……友人たちを悲しませることもあった」が，「決して人を傷つけたり，怒らせたりするつもりはなかった」と語り手に述べさせ，また，金になる仕事へのリップの嫌悪を彼の性質の「大きな欠点（great error）」とすることで，アーヴィングは自らが非難の矢面に立たされないための予防線を張っているのである（33, 35）。アーヴィングは，世間の規範からはずれた主人公を，臆面も無く「勝利者」などに決して仕立てはしないのだ。『ファンショウ』を世に問うた頃のホーソーンには，アーヴィングのような慎重さもしたたかさもなかった。

出版業者の証言などから，『ファンショウ』の出版当初，ホーソーンは作品の出来栄えに必ずしも不満ではなく，むしろその宣伝に積極的に関わった可能性が指摘されている（Pearce 309–10）。たしかに，この小論の冒頭に書いたように，姉のエリザベスの手元から『ファンショウ』を取り返したのが，1828年の出版直後ではなく，それから4年後の1832年だったことを考えるならば，その可能性は否定できない。この4年の間に，ホーソーンは雑誌に寄稿するようになっていた。そのような文章のひとつが，すでに言及した1830年の「ハッチンソン夫人」だった。このなかで彼は「私的な領域」を出ようとする女性たちを批判し，世間の眼差しに「裸の心」を晒し「心の奥の秘密（inmost secrets）」を暴かれている女性作家に苦言を呈している（23: 67）。しかし，女性たちへの批判は自らに跳ね返ってくるものだったにちがいない。

『ファンショウ』の後，ホーソーンは20年以上も長編を書くことはなかった。この短いとは言いがたい期間に，税関や雑誌の編集の仕事，あるいはブルック・ファームへの参加や結婚を経験し，実社会との関わりをもっていく。そして書き上げたのが，彼に文学的名声をもたらした『緋文字』だったのだ。この作品は，『ファンショウ』に不満を抱き，それを回収しようとしたホーソーンの文学・人生修行のひとつの成果だろう。ここでは，「リップ・ヴァン・ウィンクル」の語りの手のように，ホーソーンは税関の2階で偶然発見した古文書の編集者として登場する（1: 4）。そし

てもはや，ファンショウと同じ傾向を有する知的で男性的とは言いがたいアーサー・ディムズデイル（Arthur Dimmesdale）を登場させても，それを「勝利者」と賞賛することもない。そして，ホーソーンが社会の規範と格闘させるのは，自身と同じ男性ではなく女性の登場人物だ。『緋文字』は社会の規範からはずれた女性が，社会のなかでいかに生きてゆくかという物語なのだ。語り手は彼女と社会との折り合いのつけ方について，「大衆は横暴だ。あまり強硬に権利として主張されると，当然の道理さえ認めない。しかし，その寛容さにすがられると，当然以上のもの認めてしまうのだ」と言う（1: 162）。ここには，匿名の未熟な作家でなく，成熟し，文学の世界で生きてゆくしたたかさを身につけた一人の職業作家ナサニエル・ホーソーンがいる。

**注**

1）『ファンショウ』は一般に失敗作とされるが，ボーデの論文などにみられるように，ホーソーンの後の作品の萌芽をみる批評家もいる。

2）批評史的にみると『ファンショウ』は未だに軽視ないしは無視されている状態だが，近年ジャクソン時代の時代背景を念頭に，ジェンダーやセクシュアリティなどの観点から本作を論じるマンコール，グレイヴェン（Greven），藤村の 3 本の興味深い論文が発表されている。この小論は彼らの論考に大きな影響を受けて書かれた。

3）ホーソーンの著作（書簡，ノートブックスを含む）からの引用は，すべてオハイオ州立大学版の全集により，本文中に巻数とページ数を示す。

4）ハーレー大学のモデルは，ホーソーンが1821年から1825年にかけて学んだ母校のボウドン大学（Bodwin College）であるとしばしばされるが（Pearce 305），大学の公式ホームページによれば，その創立は1794年 6 月24日である。これは物語のなかの時代設定と大きなずれがある。アナクロニズムの問題については，ネイティヴ・アメリカンの学生の存在などを例にあげ，ベイムが指摘している（107）。

5）グランドについては，Garraty 687–8を参照。

6）ライヴァル関係を認めない批評家も存在する。ファンショウはライヴァル関係を避けることによってヒーローになるとグレイヴェンは論じている（72）。

7）考え方そのものは，18世紀の終わりから育ちつつあった（Rotund 3）。

8）法律関係の仕事と聖職者が当時もっとも学識が必要な職業とされていた（Rotund 170）。

9）この作品は，もともと『ニューイングランド・マガジン』（*New England Magazine*）の1834年の11月号と12月号に「ストリー・テラー」（“Story Teller”）の No. 1，No. 2として発表されたものである。

10）19世紀の子供たちへの母親の影響力の大きさについては，メアリー・P. ライアン（Mary P. Ryan）の研究などを参照のこと。

11）ホーソーンはエピグラムに“academy”と表記しているが，シェイクスピアの本文では“acamdeme”が使用されている。1995年に行われた，イアン・ジャッジ（Ian Judge）の演出によるロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの来日公演では，オックス・ブリッジを髣髴とさせる大学がこの芝居の舞台に設定されていた。

12）ホーソーンはセイラムの図書館から1827年 6 月19日と翌年の 4 月19日に，コットン・マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』を借りている（Kesselring 56）。

13）ナサニエル・マザーの墓碑の図像については，参考 URL のアドレスを参照のこと。

14）チャーター・ストリートの墓地に隣接して，現在グリムショウ・ハウス（Grimshawe House）を呼ばれている，旧ピーボディ（Peabody）家がある。1837年にホーソーンはここで未来の伴侶であるソファイアと出会った。

15）このような時間のずれを利用した語り方について，藤村は「自画像でもあるファンショウの共時的な逸脱を通事的なずれに変換して賞賛する，ホーソーン自身の閉じたナルシズム」であるとしている（146）。

16）ナサニエル・マザーの墓碑銘について，1892年 6 月19日付の『ニューヨーク・タイムズ』が『ボストン・ジャーナル』からの転載の形で，「19歳で老人：セイラムの墓地の奇妙な墓碑銘に光」（“An Aged Man at Nineteen: Light thrown a Curious Epitaph in a Salem Cemetery”）という記事を掲載している。エセックス・インスティテュートでマザー家の系譜に関する本が発見され，ナサニエル・マザーの生年月日が1669年 7 月 6 日であること判明，奇妙な墓碑銘の謎が解明されたとし，彼の早熟ぶりを紹介している。改めて紹介する必要があったということは，19世紀末にはナサニエル・マザーが一般の人々から忘れられた存在になっていた証だろう。自身のノートにナサニエルの墓についての思いを記してからほぼ 1 年後の1839年に，ホーソーンは友人たちの助力によって，彼の初めての定職といえるボスト

ンの税関の計量官の職につく。そして「男たちの間で働いている」という実感を彼はソファイアに書き送っている（15: 429）。

17）ミラーはファンショウをホーソーンの作品に描かれる最初の芸術家と評している（81）。

## 参考文献


Baym, Nina. "Hawthorne's Gothic Discards: *Fanshawe* and 'Alice Doane.'" *The Nathaniel Hawthorne Journal*. 1974. 105–115.

Bell, Millicent. "Notes." Nathaniel Hawthorne, *Novels: Fanshawe, The Scarlet Letter, The House of the Seven Gables, The Marble Faun*. New York: Library of America, 1983. 1255–72.

Bode, Carl. "Hawthorne's *Fanshawe*: The Promising of Greatness." *New England Quarterly* XXIII. 1950, June. 235–42.

Brodhead, Richard H. *The School of Hawthorne*. New York: Oxford UP, 1986.

Bridge, Horatio. *Personal Recollections of Nathaniel Hawthorne*. 1893. New York: Haskell House, 1968.

Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. New York: Knopf, 1977.

Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel.* Revised ed. New York: Penguin, 1966.

Garraty, John A. et al. eds. *American National Biography*, *vol. 9*. New York: Oxford UP, 1999.

Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace.* Chicago: U of Chicago P, 1985.

Greven, David. *Men Beyond Desire: Manhood, Sex, and Violation in American Literature*. New York: Palgrave, 2005.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne.* 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962–97.

Herbert, T. Walter. *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family.* Berkeley: U of California P, 1993.

——. "Hawthorne and American Masculinity." Ed. Richard H. Millington, *The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne.* 60–78.

Idol, John L. et al. eds. *Nathaniel Hawthorne: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.

Irving, Washington. *The Sketch-Book of Geoffrey Crayon, Gent.* Ed. Susan Manning. 1820–1. New York: Oxford UP, 1996.

Kesselring, Marion L. *Hawthorne's Reading, 1820–1850: A Transcription and Identification of Titles Recorded in the Charge-Books of the Salem Athenaeum.* 1949. Folcroft: Folcroft P, 1969.

Kimmel, Michael. *Manhood in America: A Cultural History*. New York: Free P, 1996.

Lathrop, George Parsons. "Biographical Sketch of Nathaniel Hawthorne." *Hawthorne's Works, vol. 12*. Ed. George Parsons Lathrop. Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1883. 441–569.

Mancall, James N. *Thoughts Painfully Intense: Hawthorne and the Invalid Author.* New York: Routledge, 2002.

Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. 1980. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1998.

Miller, Edwin Haviland. *Salem is My Dwelling Place: A Life of Nathaniel Hawthorne.* Iowa City: U of Iowa P, 1991.

Millington, Richard H. ed. *The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne.* Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Pearce, Roy Harvey. "Introduction to *Fanshawe*." *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, vol. 3.* 1964. 301–16.

Person, Leland S. *The Cambridge Introduction to Nathaniel Hawthorne.* Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Pessen, Edward. *Jacksonian America: Society, Personality, and Politics.* Revised ed. Urbana: U of Illinois P, 1985.

Pugh, David G. *Sons of Liberty: The Masculine Mind in Nineteenth-Century America.* Westport: Greenwood P, 1983.

Rotundo, E. Anthony. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basic Books, 1993.

Reynolds, Larry J. "Hawthorne's Labors in Concord." Ed. Richard H. Millington. *The Companion to Nathaniel Hawthorne.* 10–34.

Ryan, Mary P. *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity 1830–1860*. 1982. New York: Harrington Park P, 1985.

Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare, Love's Labour's Lost.* Ed. Richard W. David. 1951. New York: Methuen, 1987.

Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790–1860.* New York: Oxford UP, 1985.

Wineapple, Brenda. *Hawthorne: A Life.* 2003. New York: Random House, 2004.

シェイクスピア，ウィリアム（松岡和子訳）『シェイクスピア全集16：恋の骨折り損』ちくま文庫，2008年。

根本治「一九世紀アメリカへのアンビヴァレンス」『国家・イデオロギー・レトリック―アメリカ文学再読』南雲堂フェニックス，2009年。23–50。
藤村希「『ファンショウ』とホーソーンの独身男性芸術家の系譜」『変容するアメリカ研究のいま：文学・表象・文化をめぐって』彩流社，2007年。133–49。

**参考 URL**

ボウドン大学ホームページ
http://www.bowdoin.edu/
ナサニエル・マザーの墓碑について
http://www.hawthorneinsalem.org/image/fullpageimage.php?name=MMD1442
http://query.nytimes.com/mem/archive-free/pdf?_r=1&res=9F04E6D61E31E0033A2575A
セイラムのチャーター・ストリートの墓地について
http://www.salemweb.com/tales/charter.shtml

**付記**

本論は平成20年度古川学術研究復興基金研究費による研究成果の一部である。